

日本史学は汎用性の高い学問である

浅見雅一

文学部日本史学専攻 教授

ご覧の通りの少人数の研究会です。担当者の専門はキリシタン史ですが、研究会ではそれにとらわれず各自が調べたことを報告し、皆で議論しています。

歴史学は私たちが生きていくうえで果たして何か役に立つのでしょうか。歴史研究と言えば、昔のことを探究するだけで、現在の私たちの役に立つ学問ではないと思われるかもしれません。過去の重箱の隅をつつくような些末とも思える事象にこだわっているという印象を持たれている人もいると思います。すると、歴史研究に果たして意味はあるのかという疑問が生じることもなかりかねません。

歴史研究とは、先人の遺した史料を読み込み、そこから何らかの歴史像を描き出すものです。従来知られていた歴史を書き換える要素となるものは、主に新しい史料の発見と新しい解釈の発見の二つです。これら二つの要素によって従来知られていた歴史が書き換えられていきます。その積み重ねが歴史学を進歩、発展させていくのです。それでは、私たちの日常はこうした研究とまったくかけ離れたところに存在しているのでしょうか。実はそうではありません。例えば、会話を考えて

みてください。他人に自分の話が事実であると説明するとはします。事実であるとは断定するためには根拠が必要です。誰がいつ言っていた、どこに書いてあった、たとえばすべてを確認できなくても根拠を提示するでしょう。他人を納得させるためにはそれが必要になります。それで初めて検証可能となるからです。歴史研究ではその筋道を論文としてきちんとまとめるのです。

日本史学専攻では、卒業論文を必修として課しています。この執筆のために、自分が決めたテーマについて調べたことを自分で分析し、そこから導き出される歴史像を論理的に説明する文章を書くこととなります。調査、読解、分析、文章表現、こうしたことが論文の作成には必要になります。研究会では、そのためのトレーニングをします。日本史を学び、研究し、社会の成り立ちを知ることになります。過去を知ること、現在の私たち自身を知ることにつながるのです。

討論が研究を磨く

八重門悠水君 文学部日本史学専攻4年

日本史学専攻の学生は、実証主義史学の立場から日々研究に進んでいます。それはまさに原史料との格闘の日々です。そして、その成果を報告する機会が研究会です。

研究会の討論では、①史料論（信憑性、同時代史的位置付けなど）、②論理的妥当性、③語義の解釈、④術語（「小領主」「地侍」「国家仏教」など）の創出過程、⑤先行研究と報告論文との位置関係など幅広い観点から鋭い質問・批判が飛び交い、白熱の様相を呈します。そして、それらの質問・批判に回答する過程で各人の研究は磨かれてゆくのであり、この討論の時間こそが研究会の最大の魅力です。



学際領域のものづくり研究

博士課程3名、修士課程16名、学部5名が所属する生産工学の研究室で、産学連携・国際連携しながら異分野融合のものづくり研究にチャレンジしています。

柿沼康弘

理工学部システムデザイン工学科 教授

私の研究室は、ナノスケールの超精密加工や金属3Dプリンタなどのプロセス研究と工作機械の知能化に向けたプロセス制御の研究を軸に、産業界や世界の大学と連携しながら世の中にプロセスイノベーションを起こすことを目指しています。コトづくりや価値づくりはものづくりの上に成り立っており、ものづくりに革新を起こすことは、新たなプロダクトの創造・創出につながります。そればかりではありません。従来にない高効率、低コスト、そして安性の高い画期的な製造技術の開発は、経済的優位性を高めて、国力の強化や豊かな社会形成に大きく貢献します。

これまで、ものづくり研究は、プロセス研究と加工機械の研究が独立に実施され、発展してきましたが、プロセスからの負荷は加工機械に影響を及ぼし、加工機械の性能や動作はプロセスに影響を及ぼします。つまり、両者を切り離すことはできません。そこでシステムデザイン観点から、加工学、機械力学、熱力学、電磁気学、制御工

学、機械学習などを駆使しながら、プロセスと加工機械の相互作用まで考慮した学際領域のものづくり研究にチャレンジしています。具体的には、五感を持つ加工ロボットの研究開発や材料特性まで制御可能な3Dプリンタの研究開発などです。

研究室の特徴の一つは、産業界や国内外の研究機関と密に連携・協力して研究を進めていることです。学生たちは私とのみならず、現場を知る技術者、異なる分野の専門家、第一線で活躍する海外研究者とのディスカッションを通して研究ができます。これに加えて、ものづくり大国であるドイツの大学と交換留学を積極的に行っていることも特徴です。このような研究環境は、人間交際の場かつ相互に能力を高め合う半学半教の場であり、何より新たな研究分野を切り拓く場になっています。学生たちには、さまざまな人と関わり合いながら、ものづくり研究を存分に楽しみ、日本の産業を先導する人材になってもらいたいと願っています。

新たなものづくりに向けて

たけむらしほ
竹村志帆君 理工学研究科総合デザイン工学専攻後期博士課程1年

柿沼研究室では、ものづくりのプロセスイノベーションを起こすことを目指し、幅広いものづくり技術の研究に取り組んでいます。共同研究や国内外の研究機関との連携を多く行っていることが特徴の一つです。産業界との連携では、研究を通じて社会のよりよい発展に貢献するという大事な視点を持つことができ、国内外の技術者や研究者とのつながりは、さまざまな分野の知見を得られるだけでなく、新たな視点や気づきにつながります。

世の中の製品やサービス、価値を生み出す基盤となることが生産工学の魅力であり、その生産工学の最先端の研究に、さまざまな人と関わり、試行錯誤しながら取り組むことができるのが研究室の魅力であると感じています。

